ダンスにおけるリズムをめぐる考察:「相互の係わりあい」と「intra-action」の視座から

田巻以津香（東海大学／日本大学大学院）

1．問題設定

ダンスにおける「リズム」は，これまで様々な視点から論じられている。リズムはしばしば音楽的拍子や運動技能と結びつけられ，個々人がその外在的なリズムに「のる」ことによって成立すると理解されてきた。しかし，知的障害者を対象としたダンスサークルでの参与観察を進めるなかで，リズムは必ずしも外部から与えられるものではなく，参加者同士の関わりや環境とのやりとりのなかで生成されるのではないか，という問いが浮かび上がった。即興的な動きや不規則なリズムが重なり合う中で，思いがけず一体感や秩序が立ち現れる場面が観察され，その経験が本考察の出発点となっている。

2．先行研究の概観

リズム論は哲学・芸術学・スポーツ運動学など多様な分野で論じられてきた。クラーゲス（1971）はリズムを生命力の根源的表現とみなし，近代的合理性に対置して論じた。山崎（2018）は，リズムを文化的営みの基底にある秩序とし，演劇や舞踊における人間存在の様式と結びつけて論考した。これらはリズムを技能の次元を超えた文化的現象として位置づける点で示唆的である。

一方マイネル（1981）は運動リズムを動作そのものに内在する秩序としてとらえ，運動学習や指導における重要性を論じた。宮本（2011）は「動感メロディー」という概念を用いて，「リズムにのる」経験の内的な感覚を分析している。さらに久保（2020）は身体教育における「生成」概念の重要性を示し，クラーゲスやマイネルを参照しながらリズムを「共鳴」や「溶解体験」として論じた。これらの議論は身体とリズムの関わりを豊かに描き出してはいるが，なお「リズム＝共鳴の対象」「身体＝共鳴する主体」という二項的な構図を前提としている。本発表では，この二項的理解を超えて，リズムを関係性のなかで生成される現象として捉える視点を提示したい。

3．理論的枠組み

この課題を検討するために，ダナ・ハラウェイとカレン・バラッドの理論を参照する。ハラウェイ（2013，2017）は「相互の係わりあい」という視座を提示し，諸存在をあらかじめ自立した個体としてではなく，関係性のなかで生成されるものとして捉えた。一方，バラッド（2023）は「intra-action」という概念を用い，主体と客体が所与のものとして分立するのではなく，それらの内部作用（intra-action）の過程で生成されることを強調する。この二つの視点を援用することで，リズムを「外在的で所与の対象」としてではなく，「ともにあること」「ともにすること」のなかで立ち現れる現象として理解することが可能になる。

4．フィールドワーク事例

調査対象である知的障害者ダンスサークルでは，指導者が考えた振付が用意されているものの，その再現を目指すよりも，振付をきっかけに自分なりの動きを生成しながら音楽や他者との関係を楽しむことが重視されている。ある場面では，指導者が口伴奏とともに振付を展開したが，参加者にはうまくなじまず動きが共有されなかった。しかし，誰かが自分なりの口伴奏をし出したところ，他の参加者も様々な声や音を発しはじめ，即興的に口伴奏が全体にひろがり新しいリズムが立ち上がった。そこでは，誰かが主導して「作った」のではなく，複数の動きや音が重なり合うなかで，一体感のあるリズムが生成されていた。

また別の場面では，知的障害が重い参加者と指導者が，互いに繋いだ手を揺らしていた。はじめは指導者が拍子に合わせて規則正しく振っていたが，次第に参加者のリードで不規則な揺れへと変化した。最初はそれがリズムを外れた動きに見えたが，音楽に耳を傾けると，音楽のメロディーラインの特定の音に呼応して手を揺らしていた。音楽には，拍子・旋律・和声など複数の層があり，どこに耳を向けるかでまったく異なる音楽体験が生まれる。ここでは参加者が自らの聴き方に基づいてリズムを生成し，それに指導者が気づき応答することで，二人のあいだに新しい「リズムの場」が立ち上がっていた。この場面は，リズムがあらかじめ楽曲に固定された「拍子」によって規定されるものではなく，参加者の聴取の仕方や指導者の応答を含む関係性のなかで生成される現象であることを示している。ここで見られた手の揺れは，拍子に「合わせる」でも「外れる」でもなく，音楽と人と人との関わり合いにおいて「ともに生成されるリズム」として理解できるのである。

5．まとめ

以上の考察から，リズムは「外在的で所与の対象」ではなく，「関係性のなかで生成される現象」として理解できることが示唆された。当日はさらに具体的な事例を報告し，ダンスにおけるリズムの生成をめぐる視点を深めていきたい。

＜主要参考文献＞

ダナ・ハラウェイ『伴侶種宣言』永野文香訳．以文社．2013.
ダナ・ハラウェイ『猿と女とサイボーグ−自然の再発明』高橋さきの訳．青土社．2000.
カレン・バラッド『宇宙の途上で出会う−量子物理学からみる物質と意味のもつれ』水田博子他訳．2023.